

---

# 想い人

鈴夜 音猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

想い人

### 【Nコード】

N5205H

### 【作者名】

鈴夜 音猫

### 【あらすじ】

上流貴族の娘、翠蘭すいらんは親が決めた相手の元に嫁ぐ事になっていた。ある胸に秘めた想いを押し隠して 仮想中華。少女、翠蘭と青年劉朴りゅうはくの夢い恋物語。 小説風景12選、8月参加作品

**（前書き）**

久しぶりの投稿になります。まだまだ未熟者ですが、皆様に楽しんでいただけたなら幸いです。

澄みきつた青空を小鳥達が横切っていく。翠蘭は悲しげにその姿を見送っていた。

「翠蘭、ここにいたのか」

背後に聞こえた老人の声に、翠蘭の顔は一瞬陰る。しかし振り返った彼女は柔らかな笑みを浮かべ、膝を折った。

「あらお父様。おはようございます」

優雅に一礼した少女を見て、彼女の父、翠鳳は微笑む。

「支度は済んだのか？」

「ええ」

顔を上げた翠蘭は真っ直ぐな瞳を父に向けた。そんな彼女の鮮

やかな緋色の瞳に、翠鳳は目を細めた。

「お前は年々美しくなる。婚殿もお前に心奪われる事だろう。もうすぐ刻限だ。部屋でゆっくりしていなさい」

翠鳳はそれだけ言う邸の中へと入っていった。

翠蘭はその後ろ姿を膝を付いて見送ると、ふっと笑みを溢した。

「劉朴、もう出てきてはどう？」

くすくすと笑いながら翠蘭は立ち上がり振り返る。

木陰からバツの悪そうな顔で出てきた青年に、少女はにっこりと微笑む。

「すみません…その…」

「あら、いいのよ。ねえ、それよりどう？この衣」

くるりと回って見せながら、翠蘭は新しい衣の裾を広げた。それに合わせて少女の首飾りがキラリと煌めく。

彼女の纏う淡い水色の姫装束。黒髪に緋色の瞳と白い肌の少女には、その淡い色は少々不釣り合いだった。

「良い色だけど、私には合わないわよね。婚家から送られてきたか

ら仕方なく着たけど」

センスないわよね、と笑う少女に劉朴は何も言えなかった。何と言うべきなのかも分からない。

「姫…」

「また姫って呼ぶ。ちゃんと名前で呼んでちょうだい」

劉朴の唇に人差し指をあて、ぷうと頬を膨らませる。

薄化粧を施した整った顔が不機嫌そうに歪むのに、劉朴は苦笑いを浮かべた。

「翠蘭」

「よろしい」

途端に弾けるような笑みを見せる翠蘭に、劉朴は吹き出してしまった。

「君は変わらないな」

「あら、悪かったわね」

目尻に浮かんだ涙を拭い、劉朴は美しくなった少女を見る。

上流貴族、李家の一の姫である翠蘭は今日、貴族の若君の元へ嫁いでいく。長く李家に仕え、彼女の幼馴染みでもある劉朴としては喜ばしい事なのだが。

もうちよつとましな色は無かったのかしら、と宣う少女に劉朴は熱い想いを込めた視線を向ける。

ズバズバと物を言うものの、その容姿は美しく、心優しい姫を劉朴は幼い頃から慕っていた。

しかし、第一身分が違う。家臣が主人に恋心を抱くなど許されない事だ。

劉朴は知らず知らずの内に溜め息を吐いた。その様子を翠蘭が見つめていた事など知らずに

部屋に戻った翠蘭は卓の上に置かれた包みに首を傾げた。

（何かしら？）

手に取って見れば柔らかな感触が返ってくる。訝りながらも包みを開いた翠蘭は、はっと息を飲んだ。

同時に零れたのは涙。

「あの馬鹿……」

包みを胸に抱いたまま、翠蘭はしばらくの間、肩を震わせていた。

日が真上に昇る頃。翠蘭の乗る輿が準備を整え、姫君の登場を待っていた。

やがて下女と共に現れた姫の姿に、その場にいた全員が息を飲む。憂いを帯び、伏せられた緋色の瞳。白い肌に映える艶やかな黒髪は結び上げられ、髪飾りで留められている。

まるで天女のような出で立ちの少女を更に引き立てているのは、彼女の纏う姫装束。

誰もが感嘆の声を上げる中、劉朴は体が震えるのを懸命に押さえていた。

翠蘭の纏うその衣は、彼が密かに彼女の部屋に置いていたもの。彼女の瞳と同じ、緋色の柔らかな生地で出来た装束だった。

「劉朴、どうかしら？ 似合う？」

気付けば愛しい姫が目の前まで来ていた。

劉朴は何も言えずにただ頷く。

翠蘭は頬をほんのりと赤く染め、彼の手に自分の手をそっと重ねた。

「今までありがとう。……元気だね」

艶やかな笑みを浮かべ、少女は踵を返す。そして見送る人々に笑顔を見せながら、輿に乗り込んだ。

静かに出立した輿が見えなくなるまでじっと見送った劉朴は、ようやく握りしめていた拳を開いた。

そこには先程、愛しい姫が残っていたものが握り締められていた。

「翠蘭…」

それは彼女が大切にし、何時も身に付けていた緋と碧の勾玉が連なる首飾り。それと小さな紙切れだった。

小さく折り置まれたそれを広げると、少女らしい文字が目飛び込んでくる。

『我君想』

たったの一言。

ただそれだけで十分だった。

劉朴は遠く彼方を見つめ、静かに彼女を想った

E n d

（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございます。名前を変えてから初の投稿でしょうか…ね？（記憶なし） 長いことスランプから脱出出来ず、参加したいと思いながらも書けない状態にありましたが、最後に参加出来て充実感、達成感を感じております（笑）しかし、まだまだですのでご意見、ご感想いただけると嬉しく思います。最後までお付き合い頂き、ありがとうございました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5205h/>

---

想い人

2010年10月9日12時02分発行